

# FINA水球2019年ルール改定内容と運用ガイドライン

2019年6月11日

(公財)日本水泳連盟  
水球委員会

# 今回更新の主旨・背景

- 改訂内容：
  - 新ルール関連：
    - 今年2-4月に行った本邦内での説明会、ブロック審判講習会で出て来た質問・疑問を整理した。
    - 上記ブロック講習会以降、及び6月4-9日にブダペストで開催されている女子ワールドリーグ・スーパーファイナルでの会議及び実際に試合で発生したケースをFINA水球委員会内で整理した追加事項を加えた。
  - ルール運用ガイドライン：

今回の女子ワールドリーグ・スーパーファイナル迄にFINA水球委員会にてアップデートしたものを反映(ルールは一旦決定すると次回技術総会で承認される迄表記を変更出来ない為、都度ガイドラインして更新している)。
- 改訂内容の表記：

今回改訂した内容は赤字で表記している。

# ルール改定内容「攻撃時間」

- 下記の場合攻撃時間を20秒にリセットする  
(これ迄は30秒):
  - コーナースロー
  - シュートのリバウンド後でボール保持の変更を伴わない場合
  - 退水発生時には攻撃時間を20秒にリセットする(これ迄は30秒)。
  
- 但し;
  - a. 残り攻撃時間が20秒超ある場合の退水時には当該攻撃時間が維持される。
  - b. 両者退水の場合は攻撃時間はリセットされない。
  
- 理由・背景:  
退水、コーナースロー、シュート後のボール継続保持でオフェンスが攻め上がっている場合に再び30秒の攻撃時間を与えるのは過度である為。

# 確認・留意事項

- ショットクロックを20秒にリセットする場合(攻撃が継続する場合):
  - ゴールキーパーがシュートをブロックしてそのボールがサイドラインを割った場合のフリースロー時
  - **ゴールキーパーがボールをゴールライン外に出した場合**
  - ペナルティファウルが判定された際にはショットクロックを20秒にリセットする。
    - そのペナルティスローがリバウンドとなり再び攻撃側がボールを保持した場合
- ショットクロックを30秒にリセットする場合(攻防の転換が起こる場合が中心):
  - シュートのリバウンドボールを防御側チームが保持した場合
  - ペナルティスローがリバウンドとなり防御側がボールを保持した場合
  - 試合の残り時間1分以内のペナルティファウルで攻撃側チームが新たなボール保持を要求した場合(タイムアウトと同様、ハーフライン或いは自陣で攻撃が再開される為)。
  - ニュートラルスロー後のショットクロックは30秒にリセットされる; ルール上ニュートラルスローの時はショットクロックは30秒に再設定される為(WP 20.15)
  - **ゴールキーパーがボールをサイドラインに出した場合**
  - **ボールを保持しているチームが不正入水を犯してそのチームの選手が退水となり、攻防が変わった場合(ボール保持の転換が起こっている為、退水でも30秒にリセットする)**
- ショットクロックをリセットしない場合:
  - 一方のチームの攻撃中に相手チームの選手がボールをサイドライン外に出した場合; 攻撃側はシュートをしていないし、ボール保持の変更も無いので、ショットクロックはそのままの時間を維持
  - **防御側競技者がBall Under the Waterの反則を犯した場合はショットクロックをリセットしない。20秒(残りの攻撃時間が20秒より多い場合はその時間)にリセットする。**
    - その後のFINA水球委員会内での再検討により防御側のBUWの際はボール保持転換も、攻撃側の再保持も発生していないので、ショットクロックをそのままにしておく事が妥当だという事になった。

# ルール改定内容「フリースローの位置」

- フリースローはボールがある位置から行われる(これ迄は反則が発生した位置或いはそれより相手側ゴールに遠い位置)。
- 但し、反則が相手側2m線内で発生した場合は2m線上から行われる。
  - ✓ これ迄のルールでは反則が2m線内で為され、ボールが2m線外にある場合はボールのある場所からフリースローを行っていたが、今回のルール改定では反則・ボール共に2m線内の場合は直近の2m線上からのフリースローとなる。

# 確認・留意事項

- フィールド中央付近で防御側選手がファウルをし、ボールがサイドライン外に出た場合のフリースロー位置は？
    - これ迄通り、レフェリーが指示した場合はゴールジャッジがボールがサイドラインを割った位置の直近或いはそれ以遠にボール渡して再開。
    - ボールがサイドラインを割った場合は直接シュートは出来ない (WP 14.3)。 但し、ボールがサイドラインを割る事はオーディナリーファウルである為、一旦ボールをインプレーにした後のシュートは可能。
  
  - ボールがある位置からフリースローを行う為、これ迄判定を控えていたボールより後方のファウル(特に退水)をより積極的に判定すべきか？
    - 反則を行った位置とボールの位置の関係だけで判断すべきではなく、①ボールが前方にあってもそれがチャンスを形成しているのか、②フリースローを後方に投げる事になってもそれがチャンスを潰さないのか、③全体的なアドバンテージ状況を考えて判定すべきである。
  
  - 6mシュートが正しく行われなかったが、そのシュートがゴール或いはゴールキーパーに当たってゴールスロー位置より前方にリバウンドした場合、どこでプレーを再開するか？
    - a. 6mシュートが正しく行われなかった場合の再開はゴールスロー
    - b. 但し、今回のルール改定の精神はボールを後方に戻す事が無い様にしようというものである為、ボールのある位置からのフリースローによるターンオーバーという考え方もあり得る
- FINA水球委員会で議論した結果、下記となった:
- 今回のルール改定の主旨・精神に則り、これらはオーディナリーファウルと見なすべき。
  - 但し、ルール条文の改定はFINA技術総会を経る必要がある為、この解釈・運用はガイドラインする。
- 
- シュートがゴール後方の壁等にリバウンドしてフィールド内に落ちた場合は通常のゴールスローの位置(2m以内)にボールを戻してゴールスローを行う。

# ルール改定内容「コーナースロー」

コーナースローを行う場合、下記いずれも可能  
(これ迄はc.のみ可能):

- a. 直接シュート
- b. ボールをインプレーにしてからフェイク、或いはドリブルしてのシュート
  - フリースローと同じく、ボールを手から離す必要あり
  - インプレーにした後はどこからシュートしても構わない
  - インプレーにした後は防御側競技者がタックル可能
- c. 他のプレイヤーへのパス

# 確認・留意事項

- コーナースロー前にゴールジャッジから投げられたボールは直接シュートしても構わない。
- コーナースロー前にレフェリーがボールを取り上げた後にコーナースローからの直接シュートは認められるか？
  - ルール上レフェリーがボールを取り上げた後の直接シュートは認められない(WP 14.3)ので不可。
  - 但し、ボールを一旦インプレーにした後であればドリブル、或いはフェイクしてからのシュートは可能。
  - 従い、プレーヤーはレフェリーにボールを取り上げられない様に正しい位置からコーナースローを行う様に心掛けるべきである。

# ルール改定内容「選手交代方法」

- プレー中の選手交代をいつでも自陣ベンチ側のサイドライン外にて行える。
  - これから出場する選手とフィールド外に出る選手が共にサイドライン外の水上に視認出来る様に頭を出し、水上で視認出来る様にハイタッチする事により交代出来る；所謂Flying Substitution(これ迄は両選手が自陣再入水エリアで視認出来る様に入ってからのみ交代が可能だった)。
  - Flying Substitutionを行うのに適したスペースは最低50cmから1m。これに満たない場合はFlying Substitutionを行わない。
- これ迄通り、退水時再入水エリアでの交代も可能。
- Flying Substitutionで交代する人数の制限は無い。
- 交代者は退水時再入水エリアの横から交代位置迄泳いで行く事。Field外に出た選手は泳いで再入水エリアの横迄戻る事。
- サイドライン外のFlying Substitution Areaをウォームアップに使ってはならない。
- このルールへの違反はレフェリー或いはテーブルオフィシャルが判定する事が可能であり、WP21.16(不正入水)或いはWP 22.6(イリーガルプレーヤー)として処理される。
- 但し、退水者の交代はこれ迄通り退水時再入水エリアでのみ行われる。

# 確認・留意事項

- ペナルティスローが判定された際の交代は不可。
- 怪我をした、或いは3つ目のパーソナルファウルを犯した競技者は退水時再入水エリアでのみ交代が可能。
- プールサイドを歩いてサイドライン横に飛び込んでしまった選手への措置は？
  - そこでいちいち試合を止めるのもセンスが無い。次のインターバル時等にレフェリーが注意すべき。
  - それでも同じ事をやるのであればイエローカードを出す等してコントロールすべき。
- Flying Substitutionをする為にサイドライン外にいて良い時間は？
  - 特に規定は無いが、レフェリーは意味も無く長時間サイドライン外にいる選手に対してはベンチに戻る様に指示すべきである。
  - Flying Substitutionエリアはウォームアップエリアではない。

# ルール改定内容「タイムアウト」

- タイムアウト請求はベンチ役員の実行責任にて行われる。即ちタイムアウトレフェリーは置かない。(これ迄はタイムアウト請求権はチームの実行責任としながらも、大会毎にタイムアウトレフェリーを置いたり置かなかったりしていた)。
- タイムアウトは1試合に2回迄請求可能で、同一ピリオドに2回連続して請求しても良い(これ迄は各ピリオドに1回)。
- ペナルティファウル判定時のタイムアウト請求は認められない(これ迄と同様)
  - この時にタイムアウト請求をしてしまった場合の処置:
    - 攻撃側チーム、防御側チームのいずれが請求した場合も:
      - タイムアウトを認めず、そのままペナルティスローを行う。
      - タイムアウト請求権を行使した事にはならない。
    - 理由:
      - ゲーム進行中の不当なタイムアウト請求ではなく、インターバル中である為、ゲームの進行に影響を与えない為。
      - 元々この時のタイムアウト請求を禁じている為(ゲーム進行中の不当なタイムアウト請求とは考え方が異なる)。

# ルール改定内容「ハーフタイム」

これ迄の5分を3分に短縮

# ルール改定内容「フリースローシュート」

- 反則が発生した位置及びボールの位置が共に6m線外の場合、下記が可能(これ迄は5m線外での反則後、フリースローから直ちにシュートする事が可能だった):
  - a. フリースローからの直接シュート
  - b. ボールを視認出来る様にインプレーにした後のフェイク、或いはドリブル後のシュートが可能。ボールをインプレーにするにはボールを手から離す必要あり(WP19. 4及びWP16 図1.2.を参照)
    - ボールをインプレーにした後は当然防御側競技者がタックル可能
    - ボールをインプレーにした後は6m線内に入ってシュートしても良い
- 6m線ぎりぎりの位置でフリースローシュートを行う事が明確でないがレフェリーが可能と判断した場合は、片手を空中に向けて上げる事によりシュート可能を示す(これ迄は斯かる規定無し)。
- 反則発生位置とボールの位置が共に6m線外でないとシュート出来ない為、フリースロー位置の変更に伴い、レフェリーはこの状況でのタクティカル・ファウルを良くチェックする必要がある。チェックすべき点は;
  - a. ボールを動かす事が相手のプレーを遅らせようとしているか否か
  - b. ボールを動かすタイミング(ファウル判定前か後か)

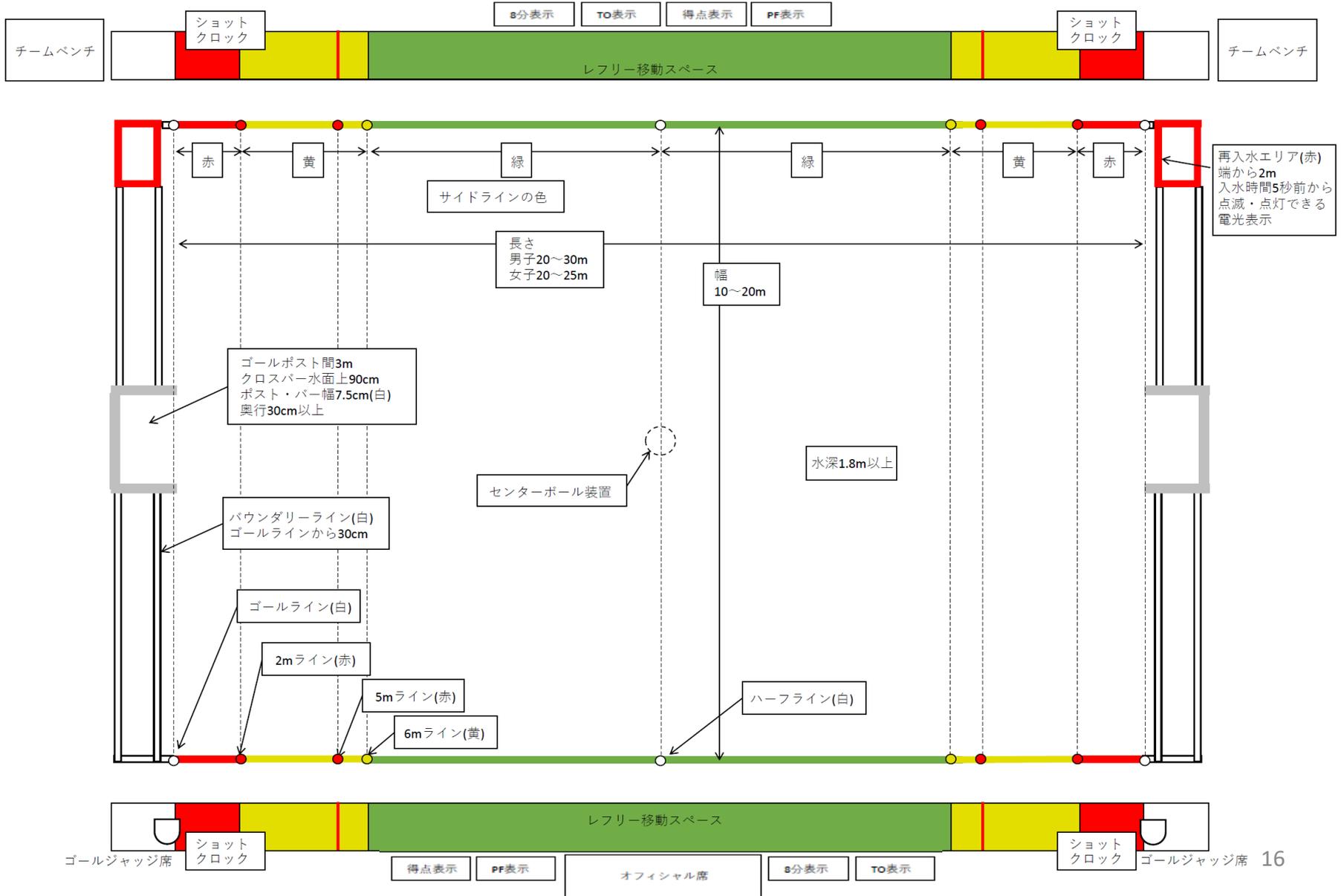
# 確認・留意事項

- ボールを片方の手からもう一方の手に移動させる事は Both Handsを犯していなければボールをインプレーにしたと見なされる。**ボールを足でプレーしてもボールをインプレーにしたと見なされる。**
- 今回のルール改定により、これ迄はシュートが認められなかった下記のケースでも6m線外のボールを一旦インプレーにした後であれば移動、ドリブル、フェイクしてからのシュートが可能となる。
  - ピリオド開始時のセンターボールを取得した後
  - タイムアウト後の再開時
  - 得点後の再開時
  - 出血を含む怪我の発生後の再開時
  - 帽子のかぶり直し後の再開時
  - レフェリーがボールを取り上げた後の再開時、或いはニュートラルスロー後
  - ボールがサイドラインを越えた後
  - それ以外の試合中断後の再開時
- ゴールスローの際に一旦ボールをインプレーにしてからシュートする事は認められるか？
  - 本ルール改定の主旨に則り、ゴールスローを一旦行った後のシュートも可能となる。

# ペナルティエリア変更に伴う変更点

- ペナルティエリアは5m線内→6m線内に変更
- ペナルティスローはこれ迄通り5m線から行われる
- 監督が攻撃中に前進して良いのは6m線迄  
(これ迄は5m線迄)
- これらに伴うラインマーカの変更：
  - 2-6m区間を黄色で表示する(これ迄は2-5mが黄色)
  - 5m地点のサイドラインに赤色のブイを設置する。
  - 審判台に色を付けられる場合は5m位置に赤い線を引く。それが出来ない場合はプールサイドの5m位置に赤色のコーンを置く。

# ルール変更に伴う競技場レイアウトと表示



# ルール改定内容

## 「ゴールキーパーのプレー可能エリア」

- ゴールキーパーはハーフラインを越えてプレーする事が可能（これ迄は自陣だけでプレー可能だった）。
  - 但し、ゴールキーパーの特権が与えられるのは6m線内のみ
- ゴールキーパーはペナルティスローを打つ事も、ペナルティシュートアウト時のシューターになる事も可能。

# 確認・留意事項

- ゴールキーパーを攻撃に参加させる代わりにゴールキーパーを出さずに7人目のフィールドプレイヤーを入れて良いか？
  - 認められない。ルールはチームに7人以上いる場合、1人はゴールキーパーである事を規定している (WP 5.1)。
- ペナルティ・シュートアウトでゴールキーパーがシューターを兼任出来るか？
  - 可能だが、その為に余計な時間がかからない様にコントロールする必要がある。
- ペナルティシュートアウト中にゴールキーパーを交代させる事は可能か？
  - 交代GKが当該試合に登録されており、依然プレー出来るのであれば可能。
  - しかしその交代GKがシューターとなる事は認められない。

# ルール改定内容「ペナルティファウル特則」

- 6m線内で攻撃側競技者がドリブル、或いはボールを持ってゴールに正対してシュートを試みている時に 防御側競技者が後ろからこれを妨害した場合はペナルティファウルが判定される(これ迄水球の対人ファウルは相手がボールを保持していない場合のみに限定されていた)。
- 但し、妨害行為が攻撃側競技者が持っているボール或いは手に対して為された場合は反則とならない。一方、腕、背中、肩への妨害はペナルティファウル対象となる。
  - ✓ 「手」を削除した理由は「手」と書くところ迄のタックルが許されるかという不要な議論を生む為。
  - ✓ 特に攻撃側競技者が水平の体勢になっている時は背後からこれを妨害する場合にボール(Ball in Handの状態の手も含めて)だけにタックル出来る可能性は略あり得ないと考えべき
- ペナルティファウル判定の基準はこれ迄と同様であり、新たに加わった要素は攻撃側競技者がボールを保持していても防御側競技者がその背後から妨害した場合は「恐らく得点となるプレーを妨害した」と見なすという点。
- この変更によりこれ迄レフェリーが判定に迷っていたケースが減る効果が期待出来る。 判定のキーポイントは；
  - a. その妨害が無ければ恐らく得点となると思われる場合
  - b. 攻撃側競技者がシュートをしようという意思とアクションがある場合
  - c. 妨害行為が攻撃側競技者の背後からの場合(横からのタックルはこれに当たらない)
  - d. 特にシュートをしようとしている選手の近くに別の防御側選手がいる場合、シュートを狙えるクリアなラインと角度があるか否か
- この変更によって攻撃側競技者がボールを保持していてもペナルティファウル判定が出来る様になった為、レフェリーは攻撃側競技者がシュート可能かどうかを見極めてからこの判定を行う必要がある。**最終的にはレフェリーの判断に委ねられる。**

## 確認・留意事項

- 攻撃側競技者がゴール前でシュートしようとしてボールを上から持った時にゴールキーパーが攻撃側競技者の手とボールを沈めて Ball Under the Water が起こった場合はゴールキーパーは後方からタックルしたのではない為、ペナルティファウルは判定されず、攻撃側の Ball Under the Water の反則でターンオーバーとなる。
- センターフォワードがセンターバックを回し込んでゴールに正対してボールを持ってシュートしようとした際にセンターバックが後ろからセンターフォワードを押さえたが、ボールの横にもう1人のディフェンダーがいた。これをペナルティ判定すべきか？
  - 全ての判定基準は「その反則が無ければ恐らく得点となったか否か」である為、このケースはペナルティ判定とはならない。
  - 全てのケースに於いてレフェリーは攻撃側選手がボールを保持していようがいまいが、防御側選手が恐らく得点となるものを妨害したか否かが最重要であり、これ迄以上にその点を良く見極めるべきである。
- 攻撃側競技者が5m辺りでシュートフェイクしており、その前方1m位の位置で防御側競技者がハンドアップしていた。攻撃側競技者の後方からもう1人の防御側競技者が攻撃側競技者の腕にタックルしてボールを奪った。このケースは？
  - 恐らく得点となるものを妨害していないので、ノーファウル。

# ルール改定内容

## 「電子機器・デジタルツールを利用するもの」(1)

以下の内容はそれを行う機器があるFINA大会のみで採用される。但し、レフェリー・デレゲート間のインカムは当委員会にて2019年度から試行していく予定。

- オーディオ機器によるレフェリー・デレゲート間の連絡：
  - 2人のレフェリーがヘッドセットを用いて試合中にコミュニケーションを取る(これ迄は斯かる規約無し)。
  - コミュニケーションを取る内容は下記例の様に2人のレフェリー間の役割分担を明確にするもの。
    - センターポジションの分担
    - ポジション2の分担
    - アドバンテージを見ている事を告げる
    - 荒くなっている箇所を確認してコントロールを試みる
    - ベンチコントロールに関する伝達、確認
  - デレゲートもヘッドセットを着用するが、試合中のレフェリー判定には介入せず、機器トラブル等の場合にのみ介入する。

# ルール改定内容

## 「電子機器・デジタルツールを利用するもの」(2)

- 退水者の再入水シグナル：
  - 退水時間残り5秒と再入水可能時間をビジュアルに示す機械を使用する(これ迄はテーブルオフィシャルが旗を上げて再入水可能を示していた)。
  - 但し、これを行える機器がある場合のみ適用される。
  - 例えばベンチ横とオフィシャルテーブルのショットクロックが入水可能時に緑色に変わるという案も検討されている。
- ビデオによるゴールインか否かの判定：
  - ワールドカップで試行された。
  - ゴールインか否かの判定はレフェリー及びFINA水球委員会によって行われる。(これ迄は斯かる規約無し)。
- Game Video Monitoring System(GVMS)
  - 試合中にレフェリーが判定出来なかったブルタリティ或いは過度に乱暴なプレーを試合後に罰する為にGVMSを用いる(これ迄は斯かる規定無し)。
  - GVMSを使用した場合、試合の結果が遡及的に変わる事はないが、ブルタリティが遡及して適用された場合には対象選手は最低次の1試合は出場停止となり、当該チームはその分だけ少ない選手数でプレーしなければならない。
  - GVMSを希望するチームは通常の抗議の場合と同様に試合後60分以内にそれを記載した書面と500スイスフラン(或いは同等の金額)を保証金としてFINAデレゲート或いは当該大会のFINAオフィスに提出する。
  - FINA水球委員会がGVMSを要求する事も可能。
  - 対象となるビデオは大会オフィシャルビデオのみ。

# レフェリー判定ガイドライン(1)

今回のルール改定に伴い、又、2018年以降に発生した必ずしもルールが完全にカバーしていない点についてFINA水球委員会は下記のガイドラインを設定した。

## ● ボールの無いポジションでの退水時の処理:

- これ迄はボールの無いセンターポジションで退水が判定され、ボールが外周にある場合は一旦ゲームを止めて退水者とその番号をクリアに当該選手とテーブルに示した後でフリースローによりゲームを再開するとしていた。
- 今回のルール改定に伴い、上記の段取りは踏むとしても、それを一連の動作で遅滞無く行い、フリースローがセンターフォワードに投じられても構わないとの変更があった。これはプレーの迅速化を促す為の措置。
- 攻撃側がダブルセンターフォワードを置いている場合でボールの無いセンターポジションで退水が判定された場合、レフェリーは上記段取りを踏む際に特にどちらの防御側競技者が退水なのかを遅滞無く示すべきである。

## ● 最重要事項:

- 退水判定の笛が鳴っている間にボールがセンターに投じられる事は避けねばならない(退水処理を明確にしない内にプレーが再開するのはフェアでない)
- 但し、レフェリーはプレーを遅延させない様に遅滞無く処理を行う必要がある。
- 一方、速攻時にボールを持たないドライブ中の攻撃側競技者への妨害行為によって退水判定が為された場合には動きを奨励するというスピリットとアドバンテージルールに鑑み、直ちにフリースローを投げる事を認めるべきである。

# レフェリー判定ガイドライン(2)

- 再入水エリアを経ずにフィールドを出てしまった選手への処置：
  - ・ 当該選手がフィールドを出た事に対して罰せられる事は無い。
  - ・ 但し、当該選手或いはその交代選手はピリオド間、タイムアウト中、或いは得点後にしか(再)入水出来ない。
  - ・ サイドラインからフィールドを出て交代選手を待っている場合はFlying Substitutionのケースが適用される。
  - ・ このケースは離水とは異なるので要注意。
- 退水判定を受けていない選手が間違えて再入水エリア(退水時再入水エリア、或いはFlying Substitutionエリア)に出てしまった場合は、**同じ場所からの再入水はその選手が有効な7人の内数である限り問題ない。**
- センターポジションでのオーディナリーファウルの有効活用：
  - ・ レフェリーはセンターポジションで退水、ペナルティ、コントラファウル、或いは笛を吹かずに流すという選択肢だけを取る傾向にあるが、状況に応じてオーディナリーファウル判定を活用すべき。
  - ・ オーディナリーファウル判定を活用すべきケース；  
攻撃側の継続性を維持するアドバンテージがあるという基本発想を持つべき。
    - ・ センターバックがセンターフォワードと絡んでいるが、退水判定迄は至らないレベルの場合（特にセンターフォワードがゴールに背を向けている、或いは位置がゴールポストより外側の状況）
    - ・ センターバック以外の防御側競技者がドロップバックしてボールスチールをしようとした際にセンターバックがセンターフォワードに退水判定には至らないレベルで絡んでいる場合。
  - ・ 一方、レフェリーは外周でのドライブや速攻時にアドバンテージを適用せずに軽々にオーディナリーファウル判定をする誤解をしてはならない。

# レフェリー判定ガイドライン(3)

- 退水判定をすべきか否かの基準  
基本的に攻撃側の有効な展開があり、防御側がそれを妨害したか否かがポイント。  
特に攻撃側の水平的展開を防御側が垂直的な体勢で妨害するものを反則判定すべき。
- センターポジションでの基準：
  - ① センターセットが独立しているか、周囲に多くのプレーヤーがいるか否か
    - ・ 前者の方がセンターフォワードがプレーする範囲が広い為、退水対象となり易い
    - ・ 後者の場合、妨害があっても有効な展開になり難い為、オーディナリーファウル判定をすべきケースが多い
  - ② ゴールからの距離  
4-5mであれば退水よりもオーディナリーファウルとした方が良いケースが多い
- 外周での基準：
  - ① ゴールに向かってドライブしているか否か
  - ② ドライブをしてからボールを受けてシュートに結び付ける為のスペースがあるか否か
  - ③ 攻撃の最前線でのドライブに対する妨害は特に注視する要あり
  - ④ 攻防の転換時の攻撃の最前線での妨害も注視する要あり

# レフェリー判定ガイドライン(4)

## \* 下記2点はブロック講習会では理解度テストに加えていた

- GK退水時に相手側がタイムアウトを請求した場合に退水判定を受けたチームが交代GKを入れるケース:
  - ケース  
防御側GKが退水となった時に攻撃側チームがタイムアウトを請求した。タイムアウト後の再開時に退水となったGKはベンチにおり、フィールドプレイヤーの1人が退水時再入水エリアに入り、交代GKがフィールドに入っていた。
  - 判定:  
この行為は認められる。
  - 理由:
    - ・ タイムアウト中なので選手の交代は自由
    - ・ 退水者も有効なプレイヤーの1人である為、7人でプレーしている状況である為、GKが1人フィールド内にいる必要がある
    - ・ フィールドでプレーしているのは6人なので問題ない
  
- 遅延行為の解釈:
  - ケース:  
6m線外に攻撃側選手と防御側選手の1セットだけがあり、その攻撃側選手がボールを受けた際に防御側選手がオーディナリーファウルを犯したが、その防御側選手はオーディナリーファウル判定直後にボールを6m線内に意図的に動かした。
  - 判定:  
遅延行為としてペナルティファウルを判定する。
  - 理由:
    - 6m線近辺にいるのがこの1セットだけである為、その地点で与えられたフリースローに基づく6mシュートは得点のチャンスと理解される。特に今回の新ルールではボールをインプレーにした後、ドリブルしてゴールに近づく事が認められる為。
    - 従い、通常のタクティカルファウル(退水)ではなく、WP23.8(遅延行為)となる。
    - 選手が犯した遅延行為である為、パーソナルファウルが科される。

# レフェリー判定ガイドライン(5)

- ペナルティ・シュートアウト時の途中でゴールキーパーが退水となった場合の措置(PSO時の退水はゲームエクスクルージョンである事に留意):
  - ゴールキーパーがシューターを兼務していない場合:  
5名のシューターの中から1人をゴールキーパーに出来るがゴールキーパーの特権は与えられない。その次のペナルティシュート後は新たに交代競技者又は交代ゴールキーパーを入れる事が出来る(WP 12.3 (f))。
  - ゴールキーパーがシューターを兼務している場合:  
そのゴールキーパーがシュートを打つ時にそれ以外のシューターの順番を1つ繰り上げて最後の5人目に追加選手をシューターとして加える。
- ブルタリティ等により以降の試合を出場停止となる選手の取り扱い方法:
  - フィールドプレーヤーの場合、出場停止となる対象試合で減らす選手はフィールドプレーヤーで無ければならない。
  - ゴールキーパーの場合、出場停止となる対象試合で減らす選手はゴールキーパーでなければならない。
    - ✓ ゴールキーパーが2人とも出場停止となっている場合はWP 5.1に則り1人ゴールキーパーを入れなければならない。

# レフェリー判定ガイドライン(6)

- その他の点：  
これ迄も説明しているので詳細は省き、下記に項目のみ記載。
  - ・ 特にセンターポジションで許容するボディコンタクトのレベルを試合序盤で示す事
  - ・ ファーストアクションを見逃さない事
  - ・ 不必要なコントラファウルを判定しない事
  - ・ ゲームコントロールの為にイエローカードを有効活用すべき（試合終盤にイエローカードを出して意味があるのか？）
  - ・ 水球のイメージアップの為に努力する事（ベンチにいる選手の位置、態度、ウェアの置き場所等も含む）

# 懲戒規定の変更

(日本水泳連盟水球委員会によるもの)

これ迄次試合以降の出場停止処分の有無に拘らずレッドカード裁定の場合にデレゲート・レフェリーによる報告書を作成していた。

変更

## 2019年度からの変更内容:

- 2019年度より報告書を提出するのは次試合以降の出場停止処分が課された場合のみとし、それ以外のレッドカード裁定は試合記録及び審判審査用紙にその旨を記載する。
- 次試合以降の出場停止処분을伴う場合は対象者に対して当該大会責任者名で処分を通知する書信を提出する。